

【哲樂】

人それぞれに培われた知性と
感性との出会いを楽しむこと

-LEE'S-

哲 樂

パーソナル・アシスタント・ギャラリー

LEE'S

の 中 庭

特別号 (No. 46)

編集責任：LYK

編集・発行 リーズ

Jun. 1999 新編 14 号

E-mail: paglees@mbx.inet-osaka.or.jp http://home.inet-osaka.or.jp/~paglees/



私哲樂・他のだれでもないわたしという存在

一旅は終りに近づいてー

LEE'S 代表 Lee

先日ふと、“旅が終わりに近づいて…”という言葉
が意識にのぼりました。

“自分を知る旅は終わろうとしている…”

それは突然でした。ただ、漠然とはわかっていたと思
います。それがハッキリと「ひとつの区切り」として感じ
ることができたのです。

その数日前に読み終えた本があります。一昨年その
時期から読み始めた分野の流れをくむ本です。そして、
“結局のところ、いままでの考え方、感じ方でいいんだ
…”ということを確認する結果になりました。

その本を読むまでに徐々にその確認作業は進んでい
ました。そしてすでにその上にたって歩き始めていまし
た。そのことをハッキリ気づいたのです。この気づきが
「区切り」を実感させ、「旅」という言葉に集約されまし
た。

本当にいい「旅」でした。この旅を支えてくれたのは、
もちろん人です。直接あるいは本などの間接的な出会い
をとおした人の知性であり、感性でした。



96年の8月頃、『心とコンピュータ』（発行：ジャ
ストシステム）を図書館で見つけました。第一線の研究

者らが講師となって開催された子供対象のサマースク
ールを記録したこの本に脳型コンピュータを研究して
いる“松本元”の項がありました。自分を知るためのひ
とつのツールを得た思いがしました。ひとつのきっかけ
でした。

松本元（まつもと げん）

東京大学理学部物理学科卒業、東京大学理
学部助手を経て、通産省電子技術総合研究所
入所、1940年東京生まれ。

それから2、3ヶ月後ぐらいでしょうか、仕事を通じ
て出会った二人は、わたしのこの旅を決定づける人たち
でした。仕事そっちのけでいろんな話をしているうちに、
“松本元”を話すことになりました。すると、「それな
ら「佐伯胖」を読めばいい。それと「ミンスキー」がい
いんじゃないか。『心の社会』（産業図書）は合うと思
う」。

佐伯胖（さえき ゆたか）

慶応大学工学部管理工学科卒業、ワシント
ン大学大学院心理学専攻、東京大学教育学部
教授（学習開発学）。日本における認知科学
「革命」の主導者との評。

マーヴィン・ミンスキー

ハーヴァード大学物理学専攻したが、同時に生物学、心理学、神経科学、数学に興味をもち、数学科に転じて同学科卒業。MIT 人工知能研究所の創立者。米国舞踏研究所など多くの組織のアドバイザーも行ってきた。関心は多岐。1927年ニューヨーク生まれ。

図書館には両方の本がありました。“佐伯胖”の『“わかる”ということの意味』（岩波書店）という本があり、読みました。子供たちの教育問題をとりあげながら、<わかる>ということはどういうことかを、それこそわかりやすく書かれています。“なるほど…”と納得し、次に分厚い『心の社会』を借りました。<目から鱗>とはあのことです。いわばバイブルになるだろうと、この本を買いました。それにしても感心したのは、この本が合うだろうと言ったその人の目です。その知性と感性です。この方からさらに<アフォーダンス>という言葉聞いたのです。96年の暮れでした。

“アフォーダンス…”とどこか耳にこびりついていた言葉を日経新聞に見つけたのは、それから数日後です。やさしい経済学の連載「複雑系からみた経済」でした。とりあえず新聞を切り抜いたものの、<アフォーダンス>にピンときませんでした。

そして年が明けて、97年は年初めから仕事でバタバタしていました。忙しいというのは外界との接点が多くなるということです。それだけ多くの発見がありました。もちろんそれは自分なりの発見です。そのことがこのコーナーにつながったわけですが。

そんな時、ひとつの案内記事を日経新聞に見つけ、驚きました。“松本元”と“ミンスキー”が参加するシンポジウムが開催されるということです。日本機械学会創立100周年記念「ロボットと未来社会」（1997年8月4日～5日東京国際フォーラムにて）です。参加を申し込んだところ、参加証が届きました。

この時外国語を学ぶ意義を本当に痛感しました。“ミンスキー”はちょっと他のパネリストたちと違って、会場内をうろうろしているのです。すぐ側にいるのに、

話すことを迷います。意を決して、「握手をしてくれませんか」と声をかけると快く応じてくれました。いろいろ話したいことはあるのに、それができない。やっと『心の社会』に感動したことを伝えました。その後が続きません。『心の社会』を教えてくれた人は“ミンスキー”のもとで学んでいますから、その彼を憶えているかと聞くぐらいでした。嬉しくもあり、苦くもある東京行きでしたが、ひとりの人との出会いが、自分をその場に運んだことを思うと、人の出会いと共感からわたしたちは、将来の糧につながる何かを得ていると再認識したのです。

そんな思いを強くして、年は明け、98年の2月ごろでしょうか、ある日曜の午後、本屋さんをぶらぶらしていて、ずいぶん迷った末に一冊の本を買いました。『免疫ネットワークの時代』（NHK ブックス）です。読み始めて著者にすごく共感しました。<人はメディア>という言葉に、自分自身が表現したかったことが、こんなに簡単な言葉で表されていることに軽いショックを受けました。そしてさらに驚いたのは、この本に<アフォーダンス>が出てきたのです。このあたりのことは昨年のレターに書いていますが、そう、日経新聞の連載と、この本の著者が同じだったのです。“西山賢一”です。

西山賢一(にしやま けんいち)

京都大学大学院理学研究科博士課程修了、
埼玉大学経済学部教授。1943年新潟生まれ。
(<http://agora.tiox.ne.jp/~niche>)

にわかに<アフォーダンス>が気になりました。そうこう思っている時に図書館で『複雑性としての身体—脳・快楽・五感』（TASC たばこ総合センター『談』編集部・河出書房新社）という本が目にとまりました。借りて帰ってから見つけたのです、<アフォーダンス>を。

<アフォーダンス>はアメリカの知覚心理学者・ギブソン（1904～1979）によって生まれた理論です。“佐々木正人”がそれを紹介しています。

佐々木正人(ささき まさと)

東京大学大学院教育学部研究科助教授(生態心理学)、1952年生まれ。

【<アフォーダンス>は動物にとって環境にある意味。<アフォーダンス>は物理的でもあり、心理的でもあり、あるいはそのどちらでもない。動物にとってこの環境には<アフォーダンス>だけが存在する。<アフォーダンス>はそれぞれの“ライフ”が発見した環境の意味。環境に探されるのは<アフォーダンス>であり、<アフォーダンス>を具現するのは動物であり、<アフォーダンス>は固体を超え、潜在する意味としてわたしたちの周囲にある。】

これは非常に夢のある話ではありませんか。環境の中に可能性は存在している。ただ、それを自分が見つけばいいんだ。そう思うと希望がわいてきます。これは昨年のちょうど今ごろです。全体の中での自分の存在というものが最高潮に際立った時期でもあり、大いに思考の助けになりました。そういったことが変化を生んで、年末のオフィスの移転から今年につながったのです。

すでにこのあたりから「旅」の終わりは近づいていたのでしょう。というも、今の自分ををいかす、何か新しい知識を学ぼうという気持ちになっていたからです。例えばそれは、『商法』であり、『都市・地域経営』であり、『美と詩の哲学』の選択でした。

けっして目には見えない内なるものが、まるで、形をもつような感覚に徐々にようになってきていました。ただ、その中身はこれまでのものと変わらないものです。変わらないけれど、形を意識させるという点で大きな変化です。確実に確固たるものになっていく、そんなイメージをもちだしていました。

そんな思いから、“西山賢一”がホームページを通じて紹介している本の一冊をひろい、買ったのが、下條信輔『<意識>とは何だろうかー脳の「来歴」、知覚の錯誤ー』（講談社現代新書）です。

この本にもくアフォーダンス>が登場するのですが、それ以上に、著者が「来歴」にこめた意味にあまりに実感がもてたものですから、この言葉を生み出した著者をうらめしく思ったくらいです。“西山賢一”のく人はメディア>と同様の感動です。

下條信輔(しもじょう しんすけ)

MIT 心理学科修了、東京大学大学院人文科学研究所博士課程修了、スミス・ケトルウェル視覚研究所研究員、東京大学教養学部助教授を経て、MIT 生物学科教授。

この本を読み終えて、“はて、いったいこれはどう考えればいいんだ…”。“いろんな人たちが「人間」について研究している。「人間」、それはわたしでもあった。彼らが提示するから「人間」がいるのではなくて、「人間」がいるから明らかにする使命がうまれる。結局のところごくごく普通に生きているではないか、わたしは…”。5月の中旬頃のことです。

まさに<意識の周辺>にそんな思いがじわっと漂っていました。それからしばらくたったある土曜日、図書館をぶらっとしていたら、渡部信一『鉄腕アトムと晋平君』（ミネルヴァ書房）が目にとまりました。障害教育にたずさわる著者が、自閉症の晋平君、そのお母さんと出会って、自問を解くきっかけと、そこにロボット開発分野の研究成果を援用して、求めるものを追求していこうとする著者自身の切磋琢磨が浮かんでくる本でした。

渡部信一(わたべ しんいち)

東北大学教育学部人間発達臨床科学講座助教授、1957年生まれ。

そこに何か同じような姿をみました。そしてこの本の中で著者が「眼から鱗」と書いていた本、黒崎政男『哲学者はアンドロイドの夢を見たか・人工知能の哲学』（哲学書房 1987年）を読んでみようと思いました。

ただ、この本は図書館になく、その続編ともいえるべき『哲学者クロサキの憂鬱—となりのアンドロイド—』（NHK出版1998年）を読み、ここにきて、何か次の段階に入ったような気がしたのです。

黒崎政男(くろさき まさお)

東京大学文学部哲学科卒業、同大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程修了、東京女子大学文学部哲学科助教授。カント哲学者であり、認知科学の研究者、1954年生まれ。

“旅はそろそろ終わりに近づいている…”、ふとそんな言葉が頭に浮かびました。“旅…、そう旅だったんだ…”。

あらためて手元にある本をとりあげました。渡邊二郎『美と詩の哲学』（放送大学教材）をちゃんと読もう。そう思い読み出して、自分自身の抱えているテーマは古代から人間が追求しているものであることが、その格調高い記述とあいまって、何か安堵したのでした。いよいよこれまでの「旅」は終わりを遂げたと実感しました。そして、新しい「旅」が始まるのです。

渡邊二郎(わたなべ じろう)

東京大学文学部哲学科卒業、東京大学文学部教授を定年退官後、放送大学教授に就任。西洋近現代哲学専攻、1931年生まれ。

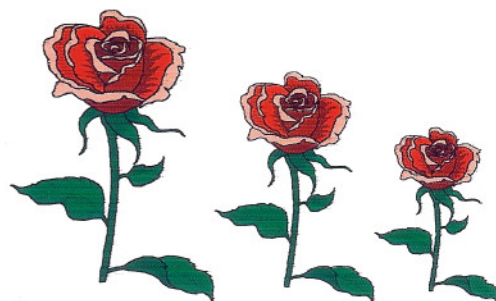


この「旅」はどのぐらいになったのでしょうか、まる3年、そうですね。何か機が熟したり、自分のものにするのに要する時間はだいたい3年といわれます。こう振り返ってみて、この「旅」を始めるのに、大きなヒントを与えてくれた人、旅の途中を支えてくれた人たちに恵まれたことに感謝しなければなりません。わたしもまた誰かの支えになったのだとしたら、これらの支えがあったからです。

「旅」の終わりを予感し始めた4月の中旬、「旅」の出発点で大きなヒントを与えてくれた人に再び会いました。特に用事があるわけではない。でも、会って話したい、話したほうがいいと感じたのです。そんな思いをうけとめ、まるでこちらの意識を引き出すように、話に同意したり、厳しい指摘を与えてくれました。

誰にもいつかは訪れるであろう、この「旅」。すでにその「旅」を終えた人もいるでしょう。今後のいつか、その「旅」を始める人もいるでしょう。すべての人がそれを支えられるわけではないけれど、必ずあなたを支える人がいる。もちろんわたしもその一人でありたいと思っています。

1999年6月5日



Information

ホームページに『研究室』ページを新たに加えました。この3年間で自分を知る旅であったということは、外界を知る旅でもあったのです。その中で考えること、感じることは、このレターやホームページの「DayLee」などに、断片的に書いてきましたが、もっと頭の中で整理したくなりました。そのための場にしたいと思っています。「研究室」ではなく「書斎」でもよかったのですが、じっくり取組むことを自分に課すため、すこし堅いイメージの言葉を選びました。テーマは3つで、そのうちの「知性のむこうに感性がある」のプロローグを先日掲載しました。機会があればどうぞご覧ください。（LYK）